

島根の歴史文化講座

2025年10月26日（於松江テルサ）

仁多郡の郷名と伝承をめぐって 一三津か三澤か一

駒澤大学 佐藤 雄一

はじめに

- 島根県古代文化センター編『出雲国風土記』の刊行
 - 1992年の設立以来、研究事業の柱の一つとして『出雲国風土記』に関する調査・研究を実施
 - 2014年度より『出雲国風土記』校訂・注釈本の作成がスタートし、2022年に地図・写本編、2023年に校訂・注釈編の2冊を刊行（以下、古代セン版『風土記』）
*報告者は、2015年度～2019年度まで編纂事業に携わる
 - 古代セン版『風土記』を基に再編集し、持ち運びやすく親しみやすいコンパクトサイズの解説書を2025年3月に刊行（以下、ポケット版『風土記』）
 - 古代セン版『風土記』の特徴
 - 歴史学・国文学・考古学など多分野にわたる最新の知見を盛り込む
 - ✧ 論考編および200頁以上の詳細な注釈を付録
 - 約200ある『出雲国風土記』写本のうち、主要な7写本を同時に比較検討できる
→30年にわたる研究を踏まえ、古代文化センターとしての釈読・本文校訂を示すとともに、後世の検証にも資する
 - 古代セン版『風土記』で用いた写本
 - ① 細川家本：現存写本中、書写年（慶長2年・1597）が明らかな最古の写本。細川幽斎が徳川家康所持本を書写。古代セン版『風土記』の底本
 - ② 倉野家本：細川家本と近似した書体で記され、古い様態を残すとされる写本
 - ③ 蓬左文庫本：尾張徳川家の文庫に伝えられた写本
 - ④ 日御碕神社本：③を徳川義直（家康九男・初代尾張藩主）が書写させ、寛永11年（1634）に出雲国日御碕神社へ奉納した写本
 - ⑤ 古代文化センター本：書写年の記載はないが、17世紀半ば～18世紀半ばの書写か
 - ⑥ 出雲風土記鈔本：『出雲国風土記』最古の註釈書である『出雲風土記鈔』（岸崎時照、天和3年〈1683〉）の本文
 - ⑦ 万葉緯本：今井以閑が万葉集関係の文献を収集した三手文庫本『万葉集』（賀茂別雷神社）に収められた『出雲国風土記』。享保2年（1717）頃までに成立
- 脱落本系写本（①～⑤）と補訂本系写本（⑥⑦）とに大別。校訂にあたっては脱落本系写本を重視

● 本日の概要

①古代セン版『風土記』において、写本の文字をどのように校訂したか

→仁多郡の郷名（三澤郷 or 三津郷）をめぐる問題を題材に

②郷名由来譚の分析

→アシスキタカヒコ神にかかわる諸伝承・儀礼

③郷名に関する（個人的な）理解

→三津か三澤か

1. 三津郷（三澤郷）の郷名をめぐる諸問題

(1) 『出雲国風土記』の記載

【史料1】仁多郡総記（805～810） *数字は、細川家本の行数を示す

仁多郡

合せて、郷は肆なり。 里は十二。

三處郷。 今も前に依りて用ゐる。

布勢郷。 今も前に依りて用ゐる。

三津郷。 今も前に依りて用ゐる。

横田郷。 今も前に依りて用ゐる。

【史料2】仁多郡三津郷条（818～829）

三津郷。家の西南廿五里なり。大神太穴持命の櫛き子、阿遲湊伎萬日子命、御湊髮八握に生ふるまで晝夜哭き坐して、辞通はずありき。余時、御祖命、御子を舟に乗せて、八十嶋を卒巡り、うらがし給へども、猶哭き止みたまはず。大神、夢に願ひ給はく、「御子の哭く由を告りたまへ」と夢に願ひ坐せば、夜に夢見坐す。御子の辞通ひたれば、寤めて問ひ給ふ。余時、「御津」と申したまふ。余時、「何處を然云ふ」と問ひ給ふ。即ち、御祖の御前を立ち去り出でまして、名川を渡り、坂の上に至り留まりて、「是處ぞ」と申したまふ。余時、其の津の水治く出でて、御身に沐浴み坐しき。故、国造、神吉事奏しに朝廷に参向ふ時に、其の水の活れ出でて用ゐる初なり。此に依りて今、産婦、彼の村の稻を食はず。若し食ふこと有らば、生まるる子は已に云ふ。故、三津と云ふ。即ち正倉有り。

(2) 郷名をめぐる解釈

・地名の由来にアシスキタカヒコ神の伝承 → 「三津」（「三澤」）に大きくかかわる

・三津郷（三澤郷）は、現在の奥出雲町三沢周辺

・中世史料にみえる郷名も「三澤（沢）」

〔建長元年（1249）「杵築大社造宮所注進状」（『大社町史』古代・中世-238）、文永八年（1271）「関東下知状写」（『大社町史』古代・中世-284）〕

・『和名類聚抄』（平安中期）の仁多郡郷名は「三處・布勢・漆仁・三澤・阿位・横山（横田）」

- ・風土記では他所にも当郷名に関わる記載があるが、いずれも「澤」と理解されてきた
〔593 出雲郡出雲大川条「三澤」、833 仁多郡神社「式澤社」〕（図1・2）
 - 多くの注釈書は仁多郡郷名の「三津」は「三澤」の誤写とみて、文字を改める
 - ・ただし、593 出雲大川条の文字は「澤」かが問題。古代セン版では「三渦」と判読（図1）
 - ・また、仁多郡総記や郷の記載部分にみえる主要写本の文字は「三津」（図3・4）
 - ・古代セン版では底本の字形を尊重し、意味のうえから整合性を優先して校訂する（意改）ことは出来る限り避けるというのが基本方針
- ⇒「三澤」説は有力だが、「三津」の情報は後に再検証する際の材料として残し、補注にて詳述する形をとった。なお、ポケット版では、さらに踏み込んだ説明をしている。

★古代セン版『風土記』818「三津郷」の補注（P581）＊抜粋

本書は脱落本系写本に従ったが、『大系』『参究』『全集』『註論』『注釈』（報告者注：それぞれ後掲表のNo.3・7・9・12・13のこと）は、833 式澤社、出雲 593 出雲大川の「三澤」、『和名抄』の郷名「三澤」などから「三澤」とする。郷の所在地は里程から、奥出雲町三沢周辺。『和名抄』に「三澤」。〔中略〕建長元年「杵築大社造宮所注進状」、文永八年「関東下知状写」などに「三沢」とみえる。

★ポケット版『風土記』「三津郷」の注釈（P89）

奥出雲町三沢周辺。本書は細本（報告者注：細川家本）により「三津」としたが「津」「澤」の字形が類似することから、「三澤（沢）」の誤りか。出雲郡出雲大川には「三沢」とみえる。

*出雲大川条では、「三渦」を「三澤（沢）」と校訂（P154）

2. アジスキタカヒコ神とその伝承

（1）アジスキタカヒコ神とアジスキタカヒコネ神

阿遲須伎高日子命（『出雲国風土記』）

阿遲鉢高日子根神・阿遲志貴高日子根神（『古事記』）、味耜高彦根神（『日本書紀』）など

⇒記紀神話に登場するが、『古事記』においては大国主神（大己貴神）の子神として系譜にみえる。

『出雲国風土記』では、出雲西部、特に出雲大川（斐伊川）流域に関連の伝承が多くみえる（神門郡・仁多郡）。

★風土記のアジスキタカヒコ神

【史料3】意宇郡賀茂神戸条（137～139・安来市大塚町周辺）

賀茂神戸。郡家の東南卅四里なり。天下造らし大神命の御子、阿遲須枳高日子命、葛城の賀茂社に坐ます。此の神の神戸なり。故、鴨と云ふ。〈神龜三年、字を賀茂と改む。〉

【史料4】神門郡高岸郷（662～664、出雲市塙治町高西が遺称地名）

高岸郷。郡家の東北二里なり。天下造らしし大神の御子、阿遲須枳高日子命、甚く晝夜哭き坐しき。仍りて、其處に高屋を造りて、坐せたまひき。即ち、高椅を建て、登り降りて養し奉りき。故、高岸と云ふ。〔後略〕

★『古事記』のアジスキタカヒコネ神

【史料5】『古事記』大国主神の神統譜

故、この大国主神、胸形の奥津宮に坐す神、多紀理毘賣命を娶りて生める子は、阿遲鉢高日子根神〔中略〕この阿遲鉢高日子根神は、今、迦毛大御神と謂ふぞ。大国主神、また神屋楯比賣命を娶りて生める子は、事代主神。また八島牟遲能神の女、鳥取神（鳥耳神）を娶りて生める子は、鳥鳴海神。〔後略〕

⇒アジスキタカヒコネ神は大国主神と多紀理毘賣命との第一の御子神とされ、迦毛大御神ともみえる。

『出雲国風土記』でも親子関係が明示されている（史料2～4）。また「出雲国造神賀詞」においても大穴持命の御子神とされており、葛木の鴨の神奈備に坐すとされる（後述）。大和国葛上郡・葛下郡のうち葛上郡上鳧・下鳧郷が関連地名。『延喜式』「神名帳」大和国葛上郡には「高鴨阿治須岐託彦根命神社」（奈良県御所市の高鴨神社が比定社）とみえ、同社の祭神。アジスキタカヒコ（ネ）神は大和国葛城地方に拠点をもつ鴨氏が祀った神。

なお、『古事記』で「大御神」と称されるのは、伊耶那岐大御神・天照大御神のほかに同神のみ。

（2）ホムチワケ伝承との類似性

（ア）『古事記』のホムチワケ（本牟智和氣御子）伝承（垂仁天皇段）

《概要》

- a. 垂仁天皇の皇子ホムチワケは、八拳鬚が胸元に至るまでものを言えなかった。
- b. 鶴（白鳥か）の声を聞き初めて声を出したので、使者を遣わしてその鳥を捕らせる。しかし、ホムチワケがものを言うことはなかった。
- c. 天皇が夢で「我が宮を天皇の御舎の如く造営すれば、御子は必ずものを言う」と神託を得る。
- d. これは出雲大神によるものであったので、出雲大神宮へホムチワケを派遣する。
- e. 大和より紀伊にぬけ、出雲へ至る地ごとに品遅部を定める。
- f. 出雲で大神を挾し、還る途上で肥河（斐伊川）の中に仮宮を作り祭る。
- g. 出雲国造の祖・岐比佐都美が出雲大神へ神膳を献上するのに際し、ホムチワケは発語。
- h. ホムチワケが発語したことに歓喜した天皇は、神宮を造らせる。
- i. ホムチワケに因んで鳥取部、鳥甘部、品遅部、大湯坐、若湯坐を定める。

(イ) 『日本書紀』のホムツワケ（誉津別命）伝承（垂仁天皇 23 年 9 月～11 月条）

《概要》

- a. 皇子ホムツワケは、生まれて 30 年が経ち八掬鬚鬚が生えるも、未だ赤子のように泣いていた。
- b. ホムツワケが天皇に近侍していた際、鶴が空を飛ぶのを見て「これ何物ぞ」と発語。
- c. 天皇はそれを喜び、その鳥をとらえて献上するよう指示。
- d. 鳥取造の祖先である天湯河板拳が出雲まで追い、捕らえる。
- e. ホムツワケは献上された鶴を弄ぶと、ついに言語を得た。
- f. その功績により天湯河板拳は鳥取造となり、また鳥取部・鳥養部・誉津部が設置された。

- ・『日本書紀』では『古事記』と異なり、出雲大神にかかわる話が記載されていない。また、鶴を捕獲したのは出雲のこととする。
- ・『古事記』ではホムチワケの発語に因んで鳥取部を設置したとあるが、『日本書紀』では天湯河板拳に對し、鶴を献上したことにより鳥取造として任命し、鳥取部を設置したとある。また、『古事記』では出雲西部、とりわけ肥河（斐伊川）が舞台となっている。
- ・記紀の間で相違はあるが、基本的には鳥取造の奉事根源を語る始祖伝承と、物言わぬミコの発語伝承とで構成。
- ・ホムチワケ：5 世紀段階の王権始祖の名（応神天皇・ホムタワケ）、王となるべきミコ
- ・言葉を話さない：未成熟。発語によって成熟（王としての靈威を得る）

⇒ミコの発語において、出雲が重要な場（復活・再生の地）として描かれている

(ウ) 風土記のアジスキタカヒコ伝承（仁多郡三津郷） → 【史料 2】

《概要》

- a. 大穴持命の御子である阿遲須伎高日子命は、須髭が八握に生えるまで昼も夜も泣いてばかりで言葉が通じなかった。
- b. 大神の夢に御子の言葉が通じる様が出現し、問い合わせたところ御子は「御津（澤）」と発語
- c. その「津（澤）」はどこかと大神が尋ねると、御子は川を渡り坂の上に至り「是処ぞ」と発語
- d. すると、そこから津（澤）の水が湧き出し、御子はその水で沐浴した
- e. これが、出雲国造が神賀詞奏上のために朝廷へ参向する際にその水を用いる由来である

→当郷や【史料 6】神門郡高岸郷にみえるアジスキタカヒコの説話は、出雲西部・斐伊川流域に展開する世界観であり、読み手にホムチワケ伝承を惹起させる。沐浴の結果、アジスキタカヒコが発語したかは明言されていないが、それは

ミコの異常な幼児性（不語） → 父が夢で神託を得る → 異常性からの脱却（発語）

という展開が自明のことであったから。また、「現代」の神賀詞奏上儀礼に至る構成も見逃せない。本説話が神賀詞奏上の神聖性をより確かなものとしている。

★ 「出雲国造神賀詞」との関係性

神賀詞祝詞では、国譲り神話が語られるとともに「皇御孫の静まる大倭國の近き守り神」として大穴持命の和魂・御子神が、大御和（大物主命）、葛木の鴨（阿遲須伎高孫根命）、宇奈提（事代主命・樞原市雲梯）、飛鳥（賀夜奈流美命）の神奈備に配置されている。

- ・「国譲りの可視的再現」としての側面を持つ神賀詞は、天皇による国土支配を保障する
- ・神賀詞奏上儀礼の初見は靈亀2年（716）だが、大御和・葛木鴨の神奈備、宇奈提、飛鳥の神奈備に坐す神々に囲まれる宮都は、藤原京（694～710）
- ・神賀詞祝詞は7世紀後半以降における神祇祭祀の整備や記紀編纂と連動して成立し、その内容は記紀の神話伝承を踏まえた構造
- ・『出雲国風土記』のアジスキタカヒコ伝承は、ホムチワケ伝承を踏まえて展開し、神賀詞とも連関。
⇒仁多郡司に品治部がいることから、ホムチワケ伝承と共に伝承が生まれる素地はあったと思われる。しかし、元来、葛城の神であったアジスキタカヒコ神が大穴持神の系譜に組み込まれたのは、記紀神話の形成や神賀詞祝詞の原型が整えられた7世紀後半段階か。

おわりに 結局、「三津」か「三澤」か

風土記の写本によって表記に違いがあり、この違いが伝承の解釈に大きく影響する。

- ① 「三津」とする写本→脱落本系写本（古い写本系統）
 - * 「ミツ」は「時が満ちた」という意味
- ② 「三澤」とする写本→補訂本系写本（新しい写本系統）
 - * 「ミサワ」は聖なる沢（湧水）を示す
 - * 『倭名抄』は「三澤郷」とし、中世以降の史料に「三沢」地名は頻出

- ・郷名起源としては、聖なる湧水の存在が重要
- ・アジスキタカヒコが沐浴した場所として、現在「三澤池」「三津池」といった伝承地があるが、三津地名に広がりはない。
- ・『出雲国風土記』にみえる「津」を伴う地名・名称は、海浜部に多い。
島根郡…346 御津浜（松江市鹿島町御津の海岸）、386 大野津社（松江市大野町の大野津神社）
楯縫郡…467 御津社（出雲市三津町の御津神社）、494 御津島・御津浜（出雲市三津町の海岸）

⇒風土記全体の用例からしても、仁多郡の地名が8世紀段階で「三澤」であった蓋然性は認められる。

【主要参考文献】

青木紀元「迦毛大御神の性格」（『日本神話の基礎的研究』風間書房、1970年）

小村宏史「『出雲国風土記』の阿遲須伎高日子命神話」（『古代神話の研究』新典社、2011年）

菊地照夫『古代王権の宗教的世界観と出雲』（同成社、2016年）

佐藤雄一「古代の氏族伝承と出雲」（島根県古代文化センター編『日本書紀と出雲觀』ハーベスト出版、2021年）

佐藤雄一「『日本書紀』と『出雲国造神賀詞』『出雲国風土記』の国譲り」(同上)

塙川哲郎「伊勢と出雲の祭祀構造」(島根県古代文化センター編『伊勢と出雲』ハーベスト出版、2024年)

島根県古代文化センター編『解説 出雲国風土記』(今井出版、2014年)

島根県古代文化センター編『出雲国風土記一地図・写本編一』(八木書店、2022年)

島根県古代文化センター編『出雲国風土記一校訂・注釈編一』(八木書店、2023年)

島根県古代文化センター編『出雲国風土記』(ハーベスト出版、2025年)

瀧音能之「出雲国造神賀詞奏上儀礼と出雲国風土記」(『出雲古代史論叢』岩田書院、2014年)

橋本剛「ここまでわかった『出雲国風土記』」(島根の歴史文化講座2023、第1回資料)

松本岩雄・瀧音能之編『新視点 出雲古代史』(平凡社、2024年)

三谷栄一「阿遲鉏高日子根神の性格」(『日本神話の基盤』培文房、1974年)

吉井巖「ホムツワケ王」(『天皇の系譜と神話 二』培文房、1976年)

吉永壮志「『出雲国風土記』の校訂について」(『出雲古代史研究』34、2024年)

【表】現代（戦後）に刊行された主要な『出雲国風土記』校訂・注釈本

No.	校訂・編者等	書名等	出版社	出版年	底本
1	田中卓	「校訂 出雲国風土記」 (『出雲國風土記の研究』)	出雲大社御遷宮 奉贊会	1953	出雲風土記鈔 (桑原家本)
2	加藤義成	『出雲国風土記参究』	至文堂	1957	出雲風土記鈔 (桑原家本)
3	秋本吉郎校注	日本古典文学大系2 『風土記』	岩波書店	1958	万葉緯本
4	小野田光雄校註・ 久松潜一補訂	日本古典全書『風土記』	朝日新聞社	1960	倉野家本
5	加藤義成	『出雲国風土記参究 改訂増補版』	原書房	1962	細川家本
6	加藤義成編	『校本 出雲国風土記』	出雲国風土記研 究会	1968	細川家本
7	加藤義成	『修訂 出雲国風土記参究』	今井書店	1981	細川家本
8	田中卓	神道大系古典編7 『風土記』	神道大系編纂会	1994	出雲風土記鈔 (桑原家本)
9	上垣節也校注	新編日本古典文学全集5 『風土記』	小学館	1997	細川家本
10	荻原千鶴全訳注	『出雲国風土記』	講談社	1999	細川家本
11	沖森卓也・佐藤信・ 矢嶋泉編	『出雲国風土記』	山川出版社	2005	細川家本
12	関和彦	『『出雲国風土記』註論』	明石書店	2006	風土記本文は No.3に拠る
13	松本直樹	『出雲国風土記注釈』	新典社	2007	細川家本
14	橋本雅之	「出雲国」(『風土記 上』)	KADOKAWA	2015	細川家本
15	沖森卓也・佐藤信・ 矢嶋泉編	「出雲国」(『風土記』)	山川出版社	2016	細川家本
16	島根県古代文化セン ター編	『出雲国風土記一校訂・注釈編一』	島根県教育委員 会	2023	細川家本
17	廣岡義隆	『出雲國風土記註解』	和泉書院	2025	細・倉・蓬・ 琦が主な校本

吉永壮志「『出雲国風土記』の校訂について」(『出雲古代史研究』34、2024年)掲載表を基に加筆

*細：細川家本、倉：倉野家本、蓬：蓬左文庫本、琦：日御琦神社本

【図1】出雲郡 593 出雲大川条「三渢」



倉野家本



古代セン本

*地図・写本編では「三澤」と釈読したが、
校訂・注釈編で改めた

【図2】仁多郡 833 神社「式澤社」



倉野家本



古代セン本

【図3】仁多郡 809・818 「三津郷」



倉野家本



古代セン本



風土記鈔

【図4】830 「云三津」



倉野家本

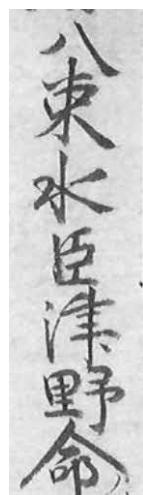


古代セン本



風土記鈔

【参考】卷首 11 「八束水臣津野命」(倉野家本)



*数字は細川家本の行数を示す

倉野家本『出雲国風土記』(個人蔵) 出典: 国書データベース, <https://doi.org/10.20730/100410146>

古代文化センターブン『出雲国風土記』(島根県古代文化センター所蔵) 出典: 同上, <https://doi.org/10.20730/100336050>

『出雲風土記鈔』(島根県立古代出雲歴史博物館所蔵) 出典: 島根県古代文化センター編『出雲国風土記一地図・写本編一』(八木書店、2021年)

